

京まち工房



WINTER
情報交流誌

no.

37

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

賑やかな冬の温もりがまちを包んでいます



京都の見慣れた風景であった京町家は、そこで暮らす人々の生活や活動によって表情がつけられ、またそれらがまちのかたちをつくってきました。

今年9月に行われた景観・まちづくりシンポジウムでは、京町家改修助成モデル事業として選定された物件(36号参照)の事業主の方もお招きし、京町家や京都の景観に対する思い、今後の展望について意見交換を行いました。

京町家を生かし、新たなまちづくりの拠点としていきたい、あるいはそうなって欲しいという人々の思いを受け、京町家まちづくりファンドでは改修助成事業を行っていく予定です。

今回の京まち工房は、シンポジウムテーマ「人と人のつながり」という視点から話題を広げていきたいと思えます。

人と人とのつながりについて地域に目を向けてみると、京都

に限ったことではありませんが、いわゆる近所づきあいが、近年希薄になっているという問題が各地域で起こっています。隣に住んでいる人が誰か分からないといった不安、ひいてはコミュニティの中でのコミュニケーション不足が、セキュリティの強化につながっているのではないのでしょうか。

傷害事件やいじめの問題等が毎日のように報道されていますが、地域の隅々に人の目が行き届き、地域が一体となって見守るというコミュニティがあれば、未然に防ぐことができたかもしれません。そのような「安心・安全のまちづくり」を目指した活動は市内の様々な地域で取り組まれています。

誰かが、見守っていてくれるという安心感、人と人とのゆるやかなつながりこそが、地域まちづくりの第一歩ではないのでしょうか。

F U N D

京町家まちづくりファンドによる京町家改修助成モデル事業 進行中 ファンド改修助成モデル事業 第2期5件を選定しました



現代の生活にかなった京町家として改修中の池内邸

平成18年度、19年度のモデル事業実施期間では、景観形成、文化発信、地域まちづくりの視点で、リーディングケースとなるモデル物件を選定し、助成事業を実施します。

そのモデル事業第2期として平成18年9月に5軒の京町家が選ばれました。第1期3件と合わせ、合計8件の京町家の改修に対し、モデル物件として改修助成費の支援を行います。

この秋から冬にかけて次々工事に取り掛かり、来年の春には生まれ変わった京町家の姿を皆さんにも見ていただける予定です。

ファンド改修助成モデル事業 第2期5件を紹介します

池内邸（中京区押小路通柳馬場西入）

～現代の生活様式に適した京町家の活用～

建築後115年を経過している間口の狭い京町家を現代の生活にかなった京町家として改修を行うものです。景観を損なうことになりかねないガレージ設置を、意匠上最大限に配慮しながら行う改修工事です。伝統的な京町家の外観イメージを残しながら現在に住みつないでいく事例として、今後の他の京町家の改修工事への波及が期待されます。

左近邸（下京区仏光寺通高倉東入）

～仏光寺周辺の景観を担う京町家の活用～

一旦は決まりかけたマンションへの建替計画を白紙に戻し、京町家を保全・再生する取組です。大正5年に建てられた材木商家の母屋の修理・修復工事を行うとともに、これからの京町家のテナント利用の一つのあり方を示すものです。改修助成が京町家の保存につながり、地域景観の保全を担うことが期待されます。

八百林（中京区丸太町通烏丸東入）

～御所南にある老舗果物店としての活用～

外観の半分が看板建築^{*}に改変され、老朽化が進む建物を店舗として再生し、同時に京町家の外観の修復を行う改修事業です。江戸時代に創業し、現在は隣のビルで営業されているお店を移転・継続されます。使われなくなって20年以上が経過した京町家を改修して、伝統の中に現代的な新しさを生み出し、御所の南側の景観づくりを担うことが期待されます。

かわさき商店（東山区五条橋東5丁目）

～五条通の陶器店としての活用～

明治期の建物を受け継ぎながら、気軽に清水焼に触れられるお店として維持・改修するもので、地域の景観や他の陶器店への回遊性も向上するものと期待されます。傷みが目立ちはじめた各部の補修を行うのと同時に本来の京町家の姿に戻す改修工事に、建築専門学校の生徒さん達も参加されます。

㈱ステーション（上京区新町通上立売上る）

～京都の文化を伝える拠点としての活用～

長い歴史のなかで、何度も増改築をされながら、姿を変えてきた京町家の改修工事を行い、外観を修復するとともに、京都の文化を全国の方々へ伝える拠点として、活用されるものです。貸ギャラリー・貸教室としても活用しながら、人が集い、地域が活性化することが期待されます。

皆さんのお力添えによって京都の風情ある町並みを次代へ残すため、京町家まちづくりファンドはこれからも京町家の保存・再生を応援していきたいと考えています。

それぞれの京町家の改修が、地域景観や地域まちづくりに良好な影響を与え、また将来的には、一般的な京町家の改修事業のモデルにもなり、幅広く京町家を保全・再生していく道筋になるものと期待しています。

京町家まちづくりファンドの取組を続けていくためには、基金の拡大が不可欠です。皆さんの応援を心からお待ちしております。

※看板建築…京町家を近代的なビルに見えるように、建物の表を全面的に改修したもの。特に戦後の高度経済成長期にこうした改修が施された。外観はいわゆる京町家とは大きく異なるが、京町家の外観に戻すことは比較的容易である。

S Y M P O S I U M

景観・まちづくりシンポジウム

「人と人のつながりが、まちを創る」を開催しました

平成18年9月9日に開催した平成18年度第1回目の景観・まちづくりシンポジウム。京都の見慣れた景観を創出している京町家は建物自体の歴史・伝統だけに価値があるわけではありません。京町家には常にそこで生きる人の姿があります。京都で暮らす人それぞれの思いが、そして営まれている生活や様々な活動が、まちの「かたち」や「表情」をつくっています。人の思いがつながりを生み、人と人のつながりがまちづくりとなって21世紀の新しい景観を創っていく—このような視座でシンポジウムの議論を深めました。

■第1部 基調報告

「人に宿るまちへの心」～これからの京都の展望～

京町家や歴史的景観の保全などに関わり活躍されている方々をお迎えして、現在取り組まれている仕事や活動の内容について、具体的にスライドや写真を交えて報告をしていただきました。

基調報告1：水野歌夕氏 写真家、水野克比古フォトスペース「町家写真館」館長

水野歌夕さんは、京都の町家で生まれ育ち、写真家として著名な父(水野克比古氏)の助手として活動される傍ら、町家の背景にある人の生きている姿を自身の作品として「京の路地風景」を撮られています。その作品には町家自体の美しさだけでなく、町家を背景にした人の生活がにじみ出ており、まちの景観はまさに人の思いでできていると改めて感じさせられる作品となっています。レンズを通して見える京都の路地における日々の営み、人と人のつながり、そしてその風景の背景となる京町家の魅力について、西陣にある築130年になる典型的な表屋造りの町家を水野克比古フォトスペース「町家写真館」として再生されたことについてお話いただきました。

基調報告2：室雅博氏 社団法人奈良まちづくりセンター理事長

室雅博さんは、お隣、古都奈良の町家や町並みの保存運動に長く関わってこられ、平成14年からは社団法人奈良まちづくりセンター理事長として、まちづくりの第一線で活躍されています。当初は、市民主体のまちづくりNPOということで経営的に厳しい状況の中、様々な地道な調査・活動に取り組んでこられました。その成果が評価され、平成6年には江戸時代中ごろの下京部分約48haが「奈良町都市景観形成地区」に指定されました。これを契機に、この地域に生まれて、お寺の鐘を聞きながら育ち、結婚・就職して地元を去っていた人達、そしてまちの賑わいも徐々に戻ってきています。「まちは体の五感で感じるもの」という信念のもと、取り組んでこられた活動についてお話いただきました。

基調報告3：三村浩史氏 関西福祉大学教授、京都大学名誉教授、財団法人京都市景観・まちづくりセンター理事

三村浩史さんは、大学で教鞭をとられる一方で、(財)京都市景観・まちづくりセンター理事でもあり、これまでセンターが取り組んできた京町家の保全・再生の取組について中心的役割を果たされています。今回は、平成17年9月に創設した京町家まちづくりファンドの委員長のお立場から、基金設立の経緯、設立趣旨、現段階の問題点、今後の展望に至るまで、その全体概要についてお話いただきました。

■第2部 記念シンポジウム

「人と人のつながりが、まちを創る」

～一軒一軒の思いをまちの景観・まちづくりに～

特別ゲスト：ジェフ・バーグランド氏 (帝塚山学院大学大学院教授)
パネリスト：水野歌夕氏、室雅博氏
進行役：三村浩史氏



センターの京町家まちづくりファンド委員として活動されているジェフさんを特別ゲストとして迎え、「人と人のつながりが、まちを創る」をテーマに第1部のパネリスト3名を含め、4

名でシンポジウムを行いました。

シンポジウムの口火を切って、ジェフさんには、ご自宅の写真を交えながら、「家が自分にコミュニケーションしてくれるところ」と京町家の魅力について、その厳しさと楽しさの両面から存分にお話いただきました。また、京町家を取り巻く現状として、「まちなかでのコミュニケーション、交流が減少してきた」ことへの危惧に加え、「のぼり、ネオン、電線などが汚く、京都に品がなくなった」など厳しい意見を述べられました。一方で、京町家まちづくりファンドは、もう一度元の京都に戻すための一つの方法であり、ファンドへの寄付を将来の京都のまちに対する自分自身の1票という気持ちを持って欲しいと強く訴えられました。

室さんは、「京都の人は保守的だけど先進的」と表現され、ひそかに奈良でもまちづくりファンドを設立しようかと考えていると、今後の意気込みなどについて語っていただきました。

水野さんからは、奈良の方が京都より町並みが残っているように日々感じていること、現在の町家ブームを通じて、皆さんに自分のまちの文化、歴史を知っていただきたいという思いが強くなり、自分たちの文化に対する自信を持つようになったことなど、心強いお言葉をいただきました。

まとめとして、進行役の三村さんから、「品性のある京都をつくっていくためには、そこで暮らしてきた町衆や町家の伝統を受け継いでいく知恵こそが大切である」と、これからのまちづくりには人の思い、人と人のつながりが重要であることを示唆されました。

また、会場からは、平成18年度京町家改修助成モデル事業の第1期として改修工事を進めることとなった3名の方に今後の町家再生にかける熱い思いを語っていただき、会場からは惜しみない拍手とともに、これから京町家の保存・再生に取り組む人達への応援エールが送られました。

■景観・まちづくりシンポジウム関連企画「水野歌夕 写真展」

景観・まちづくりシンポジウムの関連企画として、9月2日から9月9日まで、「ひと・まち交流館 京都」1階の作品展示コーナーにおいて、水野歌夕さんの写真展を開催いたしました。会場には写真集「京の路地風景」掲載の写真30点近くが展示され、訪れる多くの人に京都の懐かしい風景を思い出させてくれました。



あなたのまちづくり拝見 上鳥羽学区のまちづくり

～地域の様々な主体と大学、行政が協力した安心・安全の取組～

上鳥羽学区の概要

上鳥羽学区は南区の鴨川と桂川に挟まれた南部に位置し、国道1号など南北・東西の都市幹線道路が集中し、事業所や工場なども多く立地する面積の広い学区です。



この上鳥羽学区では、昨今の子どもを取り巻く痛ましい事件の多発を受けて、自治連合会を中心に各種団体、小学校、PTA等が一体となり、子どもの防犯対策・安全教育を展開してきました。平成16年6月には児童全員に「防犯ブザー」と「防犯ステッカー」を配布しました。また、同年12月には「子どもの安心・安全を呼びかける」ビラの全戸配布、ポスターの作成、「上鳥羽あんしん・あんぜん パトロール中」の啓発のぼり旗100本を、公園を中心に地域の各所に掲示する活動を行ってきました。

地域まちづくりセミナーの開催

平成17年の2～3月にはセンター主催の「地域まちづくりセミナー」を開催しました。コーディネーターに立命館大学産業社会学部の石本先生を迎え、住民の方々が高い関心を持っている「地域における安心・安全」をテーマに、「まちへの思いを共有し」、「今後のまちづくり活動への展開の気運を盛り上げ」、「以後の活動に継続していくこと」を目的に、2回のワークショップを開催しました。

第1回ワークショップでは、「上鳥羽学区の“寄り道・まわり道・遊び道”」をテーマに、地域の中で子どもが安心できる場所や危険な場所の確認などを行いました。

第2回ワークショップでは、「上鳥羽学区の“安心・安全の数珠つなぎ”」をテーマに、日頃の近所づきあいをベースに安心・安全のつながりを考えました。そして2回のワークショップを通じて、「親どうしのつながりをもっと深めること」、「日常の声かけや挨拶を大切にすること」、「地域みんなで子どもたちを見守ること」、「企業も地域と一体になって安全なまちへの取組を展開すること」などが確認されました。



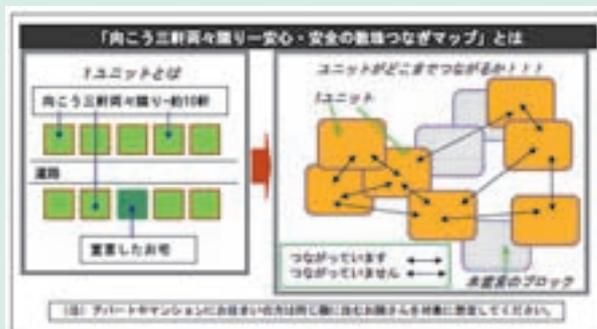
地域まちづくりセミナー

「向こう三軒両々隣りー安心・安全数珠つなぎマップ」の取組

平成17年7月には地域まちづくりセミナーの成果の報告会を開催し、「安心して暮らせる上鳥羽のまちづくり」に向けた

取組が提案されました。折しも石本先生のゼミから提案された「向こう三軒両々隣りー安心・安全の数珠つなぎマップ作成」事業が、平成17年度の「大学地域連携モデル創造支援事業」の選定を受けたこともあり、学区を挙げてこのマップづくりの取組が進められることとなりました。

この取組は、地域全体が子どもたちや高齢者を温かく見守り、支え合う地域づくりを目指したものです。住民の方々に「向こう三軒両々隣りー安心・安全の数珠つなぎ宣言」をしていただき、宣言されたお宅を基点に「向こう三軒両々隣りの10件」を「1ユニット」として、このユニットを住宅地図にプロットして「つながり度」を示す「向こう三軒両々隣りー安心・安全数珠つなぎマップ」を作成するものです。お互いの目と声かけでつなぐ「まちの安心・安全のつながり」の度合いをビジュアル的に示すことで取組状況の確認を行うことができます。この呼びかけは学区の様々なイベントの時や町内会の回覧を通じて継続して実施しています。



「安心・安全の数珠つなぎ」の考え方

また、学区内の企業のみなさんには、「安心・安全の数珠つなぎ“見守り”宣言」を呼びかけています。これは住民が進めている数珠つなぎマップの取組を見守っていただき、子どもの安心・安全に向けた取組を支援することを宣言していただくものです。具体的な取組を求めるのではなく、企業の皆さんに学区に立地する企業として、まず自治連合会を中心とした取組に連携・協力していくことを宣言していただくこととしました。

平成18年10月末現在での宣言者数は約300人、見守り宣言企業数は40社となっています。学区全体からみると、数珠つなぎにはまだ至っていません。しかし、いろいろな機会を通じて宣言者を増やし、まちの北から南へ、東から西へ数珠つなぎの完成を目指して取り組んでいます。



安心・安全の数珠つなぎマップ

あんしん・あんぜん上鳥羽推進委員会の設立

平成17年度での子どもの安心・安全に向けた様々な取組を踏まえ、さらに組織的・計画的に取組を展開することを目的とし、自治連合会と各種団体、PTA、小学校などが集まって、平成18年4月に「あんしん・あんぜん上鳥羽推進委員会」が設立されました。推進委員会では月1回の定例会を開催しており、各種団体の取組の相互報告と確認及び新たな取組の企画とその行動提起を行っています。

上鳥羽子どもあんしん・あんぜんパレードの実施

推進委員会の最初の企画として、子どもの安心・安全を守る取組を学区民にさらに広げることを目的に、平成18年5月14日に「パレード」と「啓発のぼり旗立て」を実施しました。当日は京都府警のカラーガード隊と音楽隊を先頭に約200人が行進し、学区民に協力を呼びかけました。



あんしん・あんぜんパレード

竹プランターと七夕の夕べ

子どもの見守り活動の新しい取組として、おやじの会の呼びかけで「竹プランターづくり」に取り組んでいます。この取組は手作りの竹プランターを玄関先に飾り付け、毎日の水遣りの際に、登下校の子どもに声をかけることを目的としています。平成18年6月からの取組では、約20本の竹プランターを学校の校門横の生垣に設置して、毎日学校の先生方が水遣りしながら、登校する子どもに声かけをされています。

また、七夕には子どもたちが願いごとを書いた短冊を竹プランターの周りに並べ、さらにその足元に竹行灯を並べてろうそくに火を灯して七夕の夕べを楽しみました。



竹プランター

夏の納涼フェスティバル「夜市」の開催

夏休みの子どもの見守り活動として、また子どもたちの新たな楽しみとして、「夏の納涼フェスティバル『夜市』」を推進委員会で企画し、平成18年8月8日に実施しました。当日は各種団体やおやじの会、PTAが各コーナーを分担し、子どもたちは夏の夜を楽しみ、大人はその風景を見て夜なべ談義を繰り広げていました。初めての取組で現場では様々な課題もありましたが、新しい夏のイベントが始まり、次年度以降の展開が楽しみとなっています。

上鳥羽のまちづくりの基本目標

上鳥羽学区ではこれまでの取組を踏まえ、平成18年度から「小さなおせっかいがこちよい上鳥羽のまち」を目指し、様々な手作りの取組が展開されています。今一度ご近所づきあいを見直し、おせっかいさを復活させることで、まちの安心・安全の地域力の再生を目指しています。

■平成18年度のまちづくりの基本目標

小さなおせっかいがこちよい上鳥羽のまち

日々のまちなかで、ご近所どうしがお声をかける、「小さなおせっかい」がこちよい、そんな「上鳥羽のまち」を目指します！

地域と大学とそして行政がサポートする上鳥羽の取組

上鳥羽学区の取組は子どもを取り巻く痛ましい事件の多発がきっかけでした。地域とPTAと学校が連携した目に見える活動からスタートし、「地域まちづくりセミナー」を契機として、地域と行政が連携し、さらには大学の企画力、活動力が加わることで、短期間に地域の行動力が一気に開花し、日常のご近所づきあいの再確認と自治連合会を中心とした各種団体のネットワークを生かした活動に広がっています。

「風の人」と「土の人」の交わりによって、新しい地域の文化が掘り起こされ、新しい「風土」が生まれつつあります。アイデアの種が地域の行動力と連携力を栄養にして、芽がすくすくと伸びています。みんなに心地よい香りと色合いの花が咲くように、今はみんなが水の遣り方と肥料の入れ具合を確認しつつあると言えるのが今の上鳥羽の取組です。



大学生も取組に協力



あんしん・あんぜん上鳥羽推進委員会
委員長 村田治夫さん

取組の賛同者をできるだけ増やし、「向う三軒両々隣りー安心・安全数珠つなぎマップ」を充実していきたいと思っています。各種団体の団結を強めながら、昔のように隣近所の人たちと井戸端会議ができるようなつながりをいい意味で再生し、安心・安全につなげていきたいと考えています。



上鳥羽学区自治連合会
会長 森岡梅次さん

地域の安心・安全に向け、周囲の声かけが「心のこもった優しいおせっかい」と受け止められるようなまちを目指しています。3年目を迎え、地域や事業者の皆さんにもかなり普及してきたと感じています。これからもマップづくりや各種の催しを通じて取組を広げていきたいと思っています。



上鳥羽小学校おやじの会
代表 田邊元さん

子どもが被害にあう事件があると「昔はこんなじゃなかった」という声をよく耳にします。それは子どもを守り育てる地域力が低下していることなのでしょう。「近所のおっちゃんに怒られた」と子どもたちが言う、優しい関わりが持てるまちになるよう「おやじの会」の活動も地域力の向上になればと思っています。



立命館大学産業社会学部
講師 石本幸良さん

上鳥羽学区とは平成17年1月からまだ2年足らずの交流です。でも学生と一緒にもっと長い、熱い思いの交流を感じています。私たちのまちへの提案と行動と、子どもの安全を見守る地域の思いがうまく重なり合い、農を大切にす上鳥羽のまちに新しいまちづくりの取組の芽が育っていると実感しています。



立命館大学産業社会学部
石本ゼミ 追間宏行さん

数珠つなぎマップがここまで多くの賛同者を得られるとは思っていませんでした。その賛同者の方々によってさらに活動の輪が広がり、予想もしていなかった新たな活動も始まりました。上鳥羽学区では活動が広がっていくのが目に見えて実感でき、とても楽しく活動できました。

お知恵拝借!

瀬崎まちづくり市民会議

～マンション住民も一体となった様々なまちづくり活動の実践～

今回は「快適・安心安全・共生のまち」を目標に、行政や既存の自治会活動とも連携しながら、地域のマンション住民も一体となって様々なテーマ型の取組を進めている埼玉県草加市の「瀬崎まちづくり市民会議」の活動を紹介します。

■草加市瀬崎地区

埼玉県草加市は埼玉県の東南部に位置し、市域の南部は東京都に接しています。東京の通勤圏であることから昭和50年代から人口が急激に増え、現在では23万人を超える都市となっています。瀬崎地区は草加市内に108ある自治会のうちの四つ(瀬崎第一・第二・第三町会、谷塚コーナ自治会)で構成されるブロックで、人口は約1万5千人(マンションが約半数)、世帯数では6千を超える地区です。



■瀬崎まちづくり市民会議

瀬崎地区のまちづくり活動のきっかけは、草加市の「パートナーシップまちづくり事業」と「都市計画マスタープラン地区詳細計画」のモデル地区に選ばれたことでした。そこで平成12年に地域住民を中心に「瀬崎まちづくり研究会」を発足させ、地域の課題や問題点の抽出(講演会やタウンウォッチング等)、まちづくり組織の検討(町会別やテーマ別の懇談会等)などを約1年かけて行い、平成13年7月に「瀬崎まちづくり市民会議」(以下、市民会議)が設立されました。

市民会議では、「なくそうよ まちの段差と心の垣根」のスローガンのもとハード・ソフトの両面から、地区詳細計画を検討する「地区詳細計画部会」、課題を解決する行動を起こす「アクション部会」、地域内のネットワークづくりを行う「わいわいネットワーク部会」の三つの部会ごとに取組を進めてきました。各部会においては、自治会の役員の方に部員になってもらうことで自治会活動との連携をスムーズにするとともに、広報誌などで部会内での活動に「取り組んでみたい」という人を公募する形を取り、地域の様々な方が活動に関わることができるようにしています。

■様々なテーマ型グループが発足

瀬崎地区では市民会議の設立以来、様々なテーマ型のグループが生まれてきました。地域の歴史や文化等の研究・探訪を行う「せざき歴史散歩の会」、地区のお母さん方が子どもたちと遊びながら触れ合う「一日冒険遊び場」、心と体の健康づくりを目的とした「元気アップクラブ」など、ソフト面の活動や、危険な交差点について地権者と話し合う「危険交差点改良地権者懇談会」、使われなくなった水路を潤いのある親水遊歩道に生まれ変わらせようとする「ふれあい道路検討会」など、ハード面の活動も数多く生まれ、双方を合わせると十数ものグループが活動を展開してきました。



一日冒険遊び場

■マンション住民も一体となったまちづくり

市民会議の活動では、地区のマンションの方々も徐々に関わるようになってきており、特にマンションで一つの自治会を作っている「ライオンズタワー谷塚コーナ」の方々は非常に熱心です。

「瀬崎YOYO倶楽部」は仕事をリタイアした人達を中心となり、遊ぶ・学ぶ・創る、といった活動を行っています。「ヤングオールド世代」が、このグループへの参加をステップとして、それまで入りづらかった町内会へ入るなどの効果も生まれています。「瀬崎防犯パトロール隊」は、地区でひったくりが多発したことをきっかけに結成され、結成前は年間54件だったひったくりが、平成17年には8件に減るという成果が得られています。これらのグループは集合住宅の谷塚コーナの方々も率先して関わっています。さらに「せざきマンションネット」を結成するなど、瀬崎地区内のマンションのネットワークづくりにも取り組んでいます。



谷塚コーナ



防犯パトロール隊

■新たなまちづくりのスタート

市民会議事務局長の谷古宇孝さんからは、「まちづくりの『材料』はたくさんあります。常にアンテナを張りながらも、『1人の100歩より100人の1歩』の考えを大切に、これからも地域の方々とは協力して取り組んでいきたいと思っています」。また、市民会議コミュニティ事業部長の高橋さきえさんからは、「まちづくりは10年で1サイクルだと思っています。市民会議は半分の5年が経ち、ようやく形が見えてきたものもあります。今後の5年でどうなっていくかも楽しみです」。さらに、谷塚コーナ管理組合理事長の舟本統さんからは、「マンション内だけではなく、地域とのコミュニケーションについても取り組んできました。市民会議の取組を通じて自治会に関わりを持てるようになったマンション住民も多いと思います」といったお話をいただきました。

市民会議はこれまでの活動が評価され、平成18年4月から「瀬崎コミュニティセンター」の指定管理者となりました。今後は隣接する公園も一体となった「活動を育む場」、「活動を応援できる場」、「活動の核となる場」としてコミセンの管理・運営を目指していくこととなり、さらなる活動の展開が期待されています。



左から高橋さきえさん、谷古宇孝さん、舟本統さん

2006年 まちなかを歩く日

～ つながる・広がる・まちなか交流～



京都のまちなかに暮らす人々が中心になって、「安全で安心して歩きたくなる楽しいまち」を目指し、毎年11月に取り組んでいるのが、「まちなかを歩く日」です。

平成12年に国のモデル事業として支援を受けたことをきっかけに始まったこの取組は、今年で7年目を迎えました。今年も、それぞれの地域や団体が独自の資源を生かしたイベントを開催し、コンサートやお茶会・お花でのおもてなし、歩きながら楽しめるストリートギャラ

リー、地域のご利益めぐりなど、地域の人の手で作り出される出来事でまちは賑わいました。

「今年は、各地域の取組が例年以上に多彩でした」と主催者である歩いて



オータムコンサート

暮らせるまちづくり推進会議事務局の河野さん。各学区を中心としたイベントが、学区の中の人と人、また学区を越えた人と人がつながり合う交流に広がっています。例えば城巽学区では音楽フェスティバルによる昔懐かしい人との再会、明倫学区では地域の病院や短大とのコラボレーションによる学区民と地域の新しいつながり、文化博物館ではジグソーパズルを通じた子どもと博物館の関わりなど、人と人の輪は広がっています。中でも地域と学生等が協力することで、今年も例年以上に盛り上がったイベントがありました。本能学区の「おいでやす染のまち本能」です。

本能学区では、地域に息づく伝統の染技術「京友禅」の職人さん、関係者が多くおられます。その匠の技、本もののよさを知ってもらおうと、染に関わる職人の工房を訪ねて巡る公開工房を中心に、身近に着物に親しめるイベントをこれまで実施してきました。今年度の取組は、内閣官房都市再生本部の「平成18年度全国都市再生モデル調査」の

一環として、まちづくりの具体的な活動を進めるための国の支援を受けています。色とりどりの暖簾による通り景観のしつらえなどの新企画も加え、京都市立大学(宗田研究室)、立命館大学(乾ゼミ)の二つの研究室が加わりイベントを盛り上げました。初めて参加する学生も、何度か本能学区を訪れたことのある学生も、参加者と共に地域の魅力に触れながら、地域の方々と一緒にイベントを支えました。グッズの事前準備から、当日の公開工房、受付、お茶のおもてなしと、地域の方の後姿を見ながら取り組みました。



のれんスタンプラリーの様子

特に、高倉小学校の子ども達を対象に実施した油小路通での「のれんスタンプラリー」では、安全確認など地域と学生の連携で子ども達を見守りました。

今回の取組では、学区内の方にとっても、今まで見ることのできなかった匠の技に触れ、自分のまちを再認識する機会となり、また、外から訪れた人々にとっては、着物が仕上がるまでの一連の工程を見学し、改めて洗練された職人技と職住一致のまち「本能」を知る、そんな発見と交流がありました。学生は、地域の方々との関わり、交流の中で、地域に息づく伝統産業の素晴らしさや地域の方々のイベントに対する思いを少しずつ感じながら、まちの人々の深い絆も感じたようです。また、地域の方々も、イベント実施を地域と学生とそれに関わる人々すべてが共に力を合わせて成功できたことを喜んでおられました。学生から、「楽しみながら手伝えた」、「もっと地域に関わりたい」といった声も聞かれ、地域の応援団が生まれ始めているようです。



むろまち交流ひろば・絆の道2006

本能学区だけでなく、各学区で地域と地域、人と人がつながり合う取組が進んでいます。今年も、アジェンダ21フォーラムにより交通意識調査が行われたり、明倫学区では室町

通を歩行者天国にして地域交流の場が設けられたりと、地域の安心・安全に関する取組も特徴的でした。まちなかを歩く日をきっかけに、様々な主体が共に関わる、安心・安全のまちづくりが一歩ずつ進んでいるようです。

まちづくり交流

～人から人へ、人からまちへ～

ANEWAL Gallery
アニュアル ギャラリー

e-mail: info@anewal.net

http://www.anewal.net

様々な形での交流を目指した京町家の保存・活用やまちづくりワークショップなどの取組が、京都で活躍する若い人達の手で進められています。京都で活動する学生、デザイナーで構成された「ANEWAL Gallery (アニュアルギャラリー)」。今回はその活動の一部をご紹介します。

■ ANEWAL Galleryについて

堀川今出川近くに位置する ANEWAL Gallery は、元錦糸問屋だった築120年の京町家を自分達で改修し、母屋の1階をギャラリーとして開放。アート・デザインの領域・可能性の再検証を目的としてディレクター、デザイナー、アーティスト、学生を中心に運営されています。

ANEWAL Gallery の社会的な役割を「視点の提供」と「人と人、人と場所をつなげること」と考え、その活動の場所を自らのギャラリーに限定することなく、まちの様々な場所やそこに暮らす人々との対話を通じて企画等の活動をしておられます。また、従来のギャラリー機能を見直し、社会とアート・デザインの関わり方・在り方を探り実践していく「外に出るギャラリー」を目指されています。

～ 表現スル町家 ～

自らの手で自宅の京町家の改修を行う同年代の仲間が知り合い、集まり、京町家に住む人達が増えたいというスタッフの思いから、今年6月に自ら改修を行



「表現スル町家」ツアーの様子

った記録を展示する「表現スル町家展」が開催されました。

この展示の目指すものは、「町家に住みたいと思っている人への改修方法の相談や様々な事に対するバックアップ、応援」です。「共に悩みながら良い知恵を出すことができれば」、「町家に住みたいけれど躊躇している人達の一步を踏み出せる手伝いができるのでは」との思いから、第1回目となる今回は町家の一つの表現媒体としてとらえることを、京町家の保存・活用の一つの方法として提案しています。そこには、町家ブームに流されず改修しながら住み続けることや、単に京町家を修理するだけでなく、京町家で自分達の時間を過ごし、人との共有の場にしていきたいというス

タッフの願いが込められています。

この企画の特別イベントとして、自ら改修し、自宅とされている実際の建物を見学して歩く「表現スル町家」ツアーが行われ、センターでも「ANEWAL Gallery」の他2軒の改修京町家を見学させていただきました。

「鞍馬口家(くらまぐちんち)」—地下鉄鞍馬口駅近くにある京町家で、居住者は、設計事務所勤務、木工家見習い、居酒屋勤務とそれぞれ異なる立場の3人の方です。3人で少しずつ改修し、今では「人と共有できる場」としてそれぞれの得意分野を生かした展示や工房に活用されています。

「P-house(ピーハウス)」—地下鉄北山駅から少し歩いた所にあり、10年ほど空き家になっていた農家造りの古民家です。改修当初は建築に関する知識がなかったため、古材バンクの会(現名称:古材文化の会)に相談しながら改修を始めたそうです。現在は、インスタレーション作家と書道作家の2の方が住みながら、アトリエや展示スペース、書道教室として活用しておられます。

～ 都ライト ～

それぞれの「暮らし」が影響し合い、共に発展してきた京町家の文化を大事にしたい、広げたいとの考えから始められた「都ライト」。京町家の魅力を生かし、京町家の内側から外に向けてライトアップし、通りを彩ります。人と人、人と町家、町家と通りの「織り成す暮らし」をテーマに、ANEWAL Gallery を事務局とした実行委員会形式で開催されています。



「都ライト」撮影:石野秀和氏

町家文化の輪を視覚的に象徴することで、ひとつひとつの地域の特徴を生かし、京都に残る身近な町家の美しさを地域住民の皆さんが再認識することを促進し、町家の文化がこれからも継承されていくことを最大の狙いとされています。そして、それぞれの「まち」が生き生きとしたものとなり、京都のまち全体が、より元気になっていく助けになればと考えるの取組です。

開催地の一つである上七軒通では、北野上七軒界わいまちづくり委員会準備会や花街文化研究会とも連携しながら、「北野上七軒を語る会」、「元お茶屋さん一部公開」、「昭和初期の上七軒の写真展示」も実施されました。

そのほかにも、ANEWAL Gallery では、都ライト実行委員会スタッフ、他県の学生まちづくりスタッフ、まっちワークグループ早稲田との合宿形式の合同ワークショップ(センターにおいて1ヶ月半のワークショップ製作物の企画展示を行いました。)をはじめとする魅力のあるイベントや展示の企画開催を展開されています。

若い人達による京町家の保全・再生やまちづくりに関する取組に今後も期待しています!



ANEWAL Gallery での合同ワークショップ

京町家の保全・再生の事例

～日常の「美」を楽しむ～

古建築の保全・再生の事例から

「招喜庵(重森三玲旧宅主屋部)」(左京区)



左京区、吉田神社と京都大学に挟まれた閑静な住宅街の一角に昭和を代表する庭園家、重森三玲^{※1}の旧宅があります。昭和18年に吉田神社の元社家であった

鈴鹿家から重森三玲が譲り受け、その後、茶室やお庭がつくられ新旧融合した社家建築(公家造り)として今に受け継がれています。現在、吉田神社界隈唯一の社家建築としても貴重な文化財産です。

昨年、傷みが激しくなった主屋部を重森家と親交の深い塚本家(和装商社・塚喜商事)が引き受け、今夏、芸術や伝統文化を楽しむギャラリーやサロンとして再生した「招喜庵」が誕生しました。

門をぐり、招喜庵の戸を開けると、京町家の通り庭を思わせるような雰囲気が漂う、高い吹き抜けのメインの部屋が目の前に広がります。新しい用途に合わせて土間の上に無垢フローリングが張っており、柱や梁が静かにその空間を包みこんでいます。奥の方には、システムキッチンと改修の際復活したおくどさんが仲良く顔を合わせています。



招喜庵の改修工事を行った(株)アラキ工務店は京町家・古民家改修などの「再生住宅」に特化した取組を進めている工務店で、今年7月に財団法人京都市中小企業支援センターの実施する、第11回オスカー認定^{※2}を受賞されています。改修を手がけるときは奇をてらったことはせず昔のままの姿



を復活させることを心がけているそうです。なおかつ、現代生活に適応した住み心地の良さも重視しているそうです。招喜庵の工事でも最新の設備を採用している反

面、黒光りした柱や梁を見て何か塗ったのかと思い質問をすると、「特別なことは何もしていない。すべて水拭きで汚れを落とし、油で拭いただけ」という返事に昔のものを守っていく職人さん達の思いを感じました。廊下を歩いていくと、襖続きの和室があります。襖は、重森三玲がデザインしていたものを以前から出入りのあった建具屋さんに依頼して再現したそうです。

半年ほどの時間をかけ、じっくりと進めた工事は一見どこに手を加えたのか分からない雰囲気が漂っています。古いまま使いたい、使用目的に応じた直し方をして欲しい、という塚本喜左衛門さん(塚喜商事社長)の希望を職人さん達が腕をふるって実現させた結果が詰まった建物となりました。

重森三玲旧宅というと、コマーシャルでおなじみの「お庭」が連想されます。しかし、主屋部が招喜庵として文化施設に生まれ変わったことで、建物の中につまっている柱や建具、欄間などの魅力を楽しみ、さらに建築と庭の一体となった「美」を感じることでできる空間になったのではないかと思います。重森三玲のお孫さんで、重森三玲庭園美術館(旧宅書院庭園部)の館長をされている重森三明さんは、「三玲は『住宅は個人の美術館である』と位置付けていた」とおっしゃっています。今は美術を鑑賞しようと思うと、美術館などへ行きますが、昔は調度品であったり絵を飾ったりと、個々の家で「美」を楽しんでいました。そのような日常での「美」を楽しむ心を見に来た人を感じて欲しいとのことでした。



京町家や古建築は伝統や文化を感じることができる魅力ある空間ですが、空間自身が持つ魅力だけでなく、住む人の「大切にしよう」、「日々の生活を楽しもう」という気持ちが住まいをより一層生かしているのだと思います。このような生活に密着した「美」に触れ、私達の生活空間を見直し、考えることが、「まちづくり」にもつながっていくことになるのではないのでしょうか。

※1 重森三玲：(1896(明治29)年—1975(昭和20)年)

作庭家、庭園史研究家。力強い石組みとモダンな苔の地割で構成される枯山水庭園を手がける。

代表作／東福寺方丈庭園、大徳寺山内瑞峰院庭園、松尾大社庭園など。

※2 オスカー認定：

元気な中小企業の方々が、さらに元気になっていただくために、事業計画「VC(=Value Creation)プラン」の策定や実行を支援する制度。平成14年に始まり、平成18年11月までに京都市内の73社が認定を受けている。

「京都まちなかこだわり住宅」 モデル住宅づくり進行中！

35号でもご紹介しましたが、「京都まちなかこだわり住宅」設計コンペの優秀賞案のモデルハウス建設が現在進行中です(平成17年度全国都市再生モデル調査に採択されており、センターと都市居住推進研究会の共催事業として実施。モデルハウス建設は建都住宅販売㈱の事業として実施)。

10月中旬に植栽の工事、そして10月下旬に基礎が着工されました。今年中には上棟が行われ、その際には関係者及び近隣の皆さん等幅広く呼びかけ、見学会が開催される予定です。

一方、モデルハウス建設と並行して、粟田学区及びモデルハウスが位置する石泉院町の皆さんに対する、コンペの結果とこれからの進め方に関する情報提供と交流も進行中です。

モデルハウス完成(平成19年2月ごろ予定)後は、「京都まちなかこだわり住宅」のモデルとして、都市居住推進研究会及びセンターで、情報発信やパブリシティの拠点として活用し、その後、本取組の趣旨に理解いただけ



12月初旬の現場の様子

る方に販売される予定です(販売主は、建都住宅販売㈱)。
新しいコンセプトによる京都の住まいづくり。今後、この「京都まちなかこだわり住宅」の完成とここに新しい住民を迎えることで、粟田学区のまちづくりの新しい担い手が育っていくとともに、同じ趣旨の住まいが市内各所に供給されることが期待されます。

「京都まちなかこだわり住宅」は、京都の住まいを京都の材料・職人でつくり、供給することで、京都の地場産業の振興、担い手の育成等、意識的に地域の産業連関を築き、そしてそこから良質な都心部のまちづくりにつながることを目指す住宅。このモデル像を構築することを目的に、全国の建築家を対象に、設計コンペを行いました。建築家と地域にお住まいの方や市内のまちづくりのリーダー等を交えたワークショップを経て、今年の3月に実施した審査委員会(公開)で、優秀賞の案が決定しました。



※本コンペの経過や詳細については、「京都まちなかこだわり住宅」設計コンペ報告集に掲載しております。センター窓口で販売しておりますので、お問い合わせください。(頒価1,000円)

京都市景観・まちづくりセンターのインターンシップを終えて



同志社大学 大学院
総合政策科学研究科
宇野 晃央 さん

私は、平成18年8月1日から9月1日までの1ヶ月間、インターンシップ研修で(財)京都市・景観まちづくりセンター(以下、センター)にお世話になりました。

どんな仕事をしましたか？

今回、私がお世話になったのは事業第一課です。そこで全国の学生によるまちづくりの事例の収集を行い、センターで考えられる学

生の活動に対するサポートに関する企画、有隣地蔵盆に関する学生企画の調整などを担当させていただきました。

他に、まちづくり協議会への参加(納屋町商店街、洛西西竹の里町、有隣学区)をさせていただきました。

センターの仕事の印象は？

センターの仕事は面白い!というのが正直な感想です。面白いという問題がありそうですが、確かに仕事の幅は広く、ひとつひとつが大事であることは確かです(インターンシップ生ではそうでもないのかもしれませんが)。地元に出て住民の声を生で聞く機会を得られる職場は、インターンシップ生全体の中でも、数が少ないと思います。こうした職場で実習できたことは非常に幸運でした。

個人的に私は、大学院になってから京都に来たので、京都のことが良く分かって個人的にも楽しい時間を過ごさせて

もらったという側面もあります。案外地元で実習するよりも良い経験ができたのではないかと思います。

将来につながりましたか？

これは非常に難しい問いです。というのは、センターは面白い職場であると思いますし、するめイカのように噛めば噛むほど味が出てくるような、面白い職場だと思います。しかし、味が最初からするわけではない。ある程度噛まなければ味がするのかわからない、結構成果を感じるには当たり前ですが労力が必要です。ただし噛み続けてもそれがするめなのか、ゴムぞうりなのか分かるまでも時間がかかります。そこまで根気と労力が続くのかという不安と、私は凝り性なのでどっぷり漬かりきりになって、他のことが見えなくなるといってもいいか、またトラブルらしいトラブルに幸い見舞われることがなく、実習期間を過ごさせていただいたことから、いい面だけしか見ていないのではないかとといったような思いもあります。

実習自体はやって良かった?それとも…?

実習をやって良かったと思います。なぜかといえば、社会をいつもと違った視線で見ることや、普段であれば、話をする機会のない方と話をする機会を得ることができ、視野の広がりを実感し、非常に充実した物にすることができたからです。

業務を実際に、体験することによって少しではありますが、社会体験をすることもできました。本当に1ヶ月ありがとうございました。

私と京都



京都工芸繊維大学教授

日向 進

「かるい」建築

大学院に進んだとき、全国的な民家調査の一環として京都市内の町家調査が行われていた。進学した当初はスペイン建築史をやりようと思っていたのだが、調査のなかで訪れたある町家の坪庭を見て以来、京都の町家にとりつかれてしまった。ということで、京都の町家を研究課題の一つとしているなかで、このところ「かるい」建築とは、ということについて考えている。井原西鶴の「京つくりの立家かるうして」という表現に出会ったのがきっかけである。

西鶴は、町人社会がもっとも成熟したといわれる元禄時代を中心として、

町人の生活を生き生きと描いたことで知られている。西鶴は別の草子で、唐木や金銀、螺鈿などをふんだんに使って飾り立てた、堺の店の座敷を「むかし座敷」と表現している。時代おくれ、というようなニュアンスであろうか。

町家の格子には多様な形式があるが、堺格子、京格子と呼ばれるものがある。

堺格子というのは、太い格子に数条の横貫を通したもので、堺の鉄砲鍛冶の店先に建て込まれていた。戦国大名の力関係や戦闘形態を一変させた、鉄砲という当時の先端兵器を扱うにふさわしい、無骨でいかめしい構えである。

一方、木柄の繊細な格子を千本格子とか京格子という。木柄の太い格子が、工具の発達とともに洗練の度を加え、千本格子に到達する。みやこ風へのあこがれを込めて「京格子」と呼ばれるようになり、近世における町家に用いられる格子の手本とされた。

さて「かるい」という表現をどのように評価するのかというとき、思い浮かぶのが桂離宮である。八条宮の別荘として造営が始まった、元和4～5年(1618～1619)頃とみられる初代智仁親王の書状に「瓜畠之かるき茶屋」という文言がみられる。

桂離宮の建築は先年全面的に修理されたが、工事を担当した棟梁たちの所見によれば、用材はほとんどが「地物」、つまり近隣の山から産したものという。北山や丹波から筏に組んで桂川(保津川)に流し、陸揚げされたところが嵯峨や桂離宮の近くにあった筏浜である。

京都の町家の用材も、同じようにして運ばれてきた杉や松を主体にしている。このような町家に対して、住み手や大工は「仮屋建て」という表現を用いてきた。「仮屋」という言葉には、装飾過剰で事大主義的な堺の町家を「むかし」と評した西鶴が、京都の町家に対して「かるうして」と表現したのと相通ずるところがあるように思われる。京都というより日本の建築文化を代表するといってもよい、桂離宮の建築が「かるき」と書き留められたように。

「仮屋」のようにさりげなく組み立てるための工夫を積み重ねてきたのが、京都の建築的伝統である。身近な素材に精緻な技術が注入され、洗練された造形として結実しているのが京都の建築であり、町家である。「かるい」とは軽浮薄ということでは決してない。「かるい」という言葉には京都が育んできた建築の本質がひそんでいるように思われる。

センター解説アワー

【近代化遺産】

平成2年から、文化庁の指導のもとに、全国的に「近代化遺産調査」が始められました。これは日本の近代化を支えた産業、土木、交通などの建築物・土木構築物を調査するもので、同時期から「近代化遺産」という用語が一般に用いられるようになりました。

平成8年には、文化財保護法改正により登録文化財の制度が導入され、近代化遺産も文化財保護の対象として本格的に位置付けられるようになりました。京都の代表的な近代化遺産には、琵琶湖疏水の関連施設である蹴上

発電所や南禅寺水路閣、旧二条駅舎、梅小路機関車庫などを挙げるができます。京都市では平成11～14年度に近代化遺産の調査を実施し、「産業遺産編」、「近代建築編」の2冊の報告書が既に刊行されています。この調査では、これまで知られていた代表的な遺構に加えて、数多くの近代化遺産が残されていることが確認されました。

京都は平安京以来の長い歴史を資産として、明治以降の近代化に取り組むことで、独自の文化を持った近代都市を形成してきたということが言えるでしょう。古代から近代に至る各時代の歴史を重層的に残す町並みが、京都ならではの魅力と言えるのではないのでしょうか。

センター語録

京都市景観・まちづくりセンターで、今年の3月から経理のお仕事をさせていただいております。

京都のまちづくりやセンターがあるということさえ知らなかった私にとっては、毎日が覚えることだらけでした。また、会計の基準も変わり大変でしたが最近仕事にも慣れ落ちてきたかな〜とやっと思えるようになってきました。

センターでお仕事をさせていただいての感想や良かった点を書きたいと思っています。

皆さんこの仕事が好きで誇りをもって、仕事をされていると思いました。京都の町家が減っているということや町家を守ろうとしている人達や京都の

まちづくりを真剣に考えている人達がいるということが分かり、私自身も真剣に？京都の今後を考えるようになりました。新聞やニュースなどで「京都」や「京町家」や「まちづくり」などの言葉に敏感に反応するようになりました。生まれてから幼稚園頃まで京都の町家に住んでいましたが、今は駐車場になっていますので残すことができず残念です（今なら残す方向で考えるだろうなと・・・）。今ある町家が一軒でも多く未来に適応するような形で残っていけばいいな〜などのんきなことを思っています。現代の形で町家が残りその仕事を近くで見ることができずので、本当にここで仕事ができ、良かったと思っています。

(景観・まちづくりセンター事務局 O・K)



センターからのお知らせ

京町家・茅葺農家みにちゅあーとキットを販売開始！

精巧なミニチュアの京町家と茅葺農家のキット(1/100縮尺)を販売開始しました。あなたも組み立てに挑戦してみませんか？

価格(京町家・茅葺農家とも)

着色済みキット 6,279円(税込み)

白キット 4,179円(税込み)

このキット販売の収益金は、全額「京町家まちづくりファンド」への募金に当てさせていただきます。

*現段階ではセンター窓口のみでの販売です。



センター活動拠点のご案内

京都市景観・まちづくりセンター

〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の1 (河原町五条下る東側)

「ひと・まち交流館 京都」地下1階

TEL 075-354-8701

FAX 075-354-8704

e-mail : machi.info@hitomachi-kyoto.jp

●開館日(相談の受付等)

9:00~21:30 (月曜日~土曜日)

9:00~17:00 (日曜日・祝日)

●休館日

毎月第3火曜日(国民の祝日に当たるときは翌日)

年末年始(12月29日~1月4日)

なお、センターへのお越しの際は公共交通機関をご利用ください。



平成18年度の賛助会員を募集しています。京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

【特典】

- ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
 - ・冊子等センター発行物の割引
 - ・ニュースレターでの活動紹介
 - ・シンポジウム、セミナー等への優待
- 賛助会員の方は、景観・まちづくり大学のすべてのセミナーを無料で受講できます。(賛助団体の方は一つのセミナーで3人まで受講可)

【年会費】

個人1口：5千円 団体1口：5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

京都市景観・まちづくりセンターホームページ

<http://machi.hitomachi-kyoto.jp>